

遊びと子どもの発達②

〈悪口うたの遊び〉



加古里子

生をこの世にうけた子は、まわりの人々の語りかけや話しぶりに対応し、声や音をききわけ、それにこたえてちいさな叫び声を発する。アーとかウツクンという言葉にもならぬその小さな声やがてかわいい声の連なりとなり、学者はそのモニョモニョ言葉を喃語と呼ぶ。

その中に明らかにママとかウマウマという単語が、意味概念をともない、意志指向を持ってあらわれる時、その子が言葉を得たという事となり、その母国語は使うよろこびと答えがえられるう

れしきによって、人間同士の意志疎通の重要な手段として、加速度的に語いがふえてゆく。

もし子どもに言葉をかけたり、顔を見せて語る事をせず、言葉というものの楽しさと共通の喜びを抱かせないと、子どもは言葉を覚え使い反応をたしかめるといふ積極さを失い、言葉おくれや寡黙な子となるおそれを秘めるに至る。TVの影響を重視する向もあるが、そうした子の周囲の言葉を交す事が不十分であるといふ培地がある所に、更に所謂「テレビ子守」をさせる為、自らが

声を発し意志表明とその確認を求める積極さを失うのは当然という事がいえよう。

通常、子ども言葉の数は、次のようにふえてゆく。1)

一歳 2、3 語 二歳 200 ~ 300 語 三歳 850 ~ 900

四歳 1500 ~ 1700 五歳 1900 ~ 2000 六歳 2300 ~ 2600

こうして子どもが次々と言葉を覚え、それを使う間、子どもは妙な言葉に気がつく。それは相手が大人だったり、同年位の子であつたりするが、いままでとはちがう雰囲気や顔付きで「バカ／＼」とか「オッタンチン」という言葉をあびせかけられた時である。その原因は何かいたずらをした時だったり、砂場でシャベルをとろうと争つた為だったのである。その妙な言葉の意味が定かでないにしても、その異常さと前後の様子から、それは、相手に対して何か鋭い意図を秘めているらしい事を子どもは感取し、その言葉をしっかりと覚えこむ。そして機会をうかがい、その相手や第三者に、その言葉をなげかけてみる。するとその時示した異様に素早い相手の反応が、子どもを又次の機会にも使おうという誘惑にかりたてる。

こうして子どもの話の中に「悪口」に関するものが次々とたくわえられてゆく。2)

へバカ パンまで 口あける

へバカ カバ チンドン屋 お前の母さん

デベソ んだからお前もデベソ

へいじわる根性 しりまがり

へひとりふたり サンめの子

山の中の くそかがし

へあの子どこの子 ミヤマの猿の子

わら一わもってこい 尻っちょまっ赤に

やいちゃるぞ

へ女をいじめるヤセ男 おふろに入って

浮いちゃった

へ女にからむへビ男 女にまけるピキ男

へ男にかみつくブス女 ブタが顔みておどろいた

へ男と女と豆いり にてもやいても

くい手がない

へ誰れかさんの頭に チョンチョコリンが

とまった 早くとんねと 坊主になるぞ

へ誰かさんのうしろに チョチョコリンが

ついた

へせおった しょった 誰れかさんがしょった

へ泣きみそ三文目 よくないた五文目

へ泣きみそ おこりみそ 丹後のえびす

がたらんと ワンワと泣いた

こうした一般的なものばかりではなく、その子の特長や個人攻撃も容赦なく行なわれる。³⁾

へおたふく 三ふく 風がふいて 四ふく

へおたやん ころんでも 鼻うたん

デベンがころんで 足つかず

へおかめの だら面ちよう やけたらへっこんだ

へおたふく めふく はちの咲いためふく

へデブデブ 百貫デブ 電車にひかれて

ベッチャンコ

へデブ でんぐりかえって おなかがタイコ

おケツがラッパ プカドンプカドン

へやせつポチ コーロギの三年ほし

へヤセ のっぱ ヒョウロヒョロ

骨皮ギスギス筋えもん

へ佐藤 斉藤 犬のくそ

阿部に渡辺 猫のくそ

へカッチやん カズの子 にしんの子

おケツをねらって カッパの子

へカッチやん カズの子 にしんの子

ネコにとられて キャッキャッキャ

へキいちゃん 木ねずみ どぶねずみ

へケいちゃん 毛だらけ灰だらけ

おしりのまわりがくそだらけ

へキンちゃんのケツに しらみが四ひき

しがみついて しんどった

へミッチちゃん 道々 ノコたれた

こうした悪口うたをあびせられる時、その子はわが身の不運と、わが名の不幸を嘆ずるばかりでなく、そのくやしや怒りから、あの憎き相手に痛撃を返さなければと思ひ、その相手の体やくせがなんであるかを見ぬき、名前をいれこんだ最高の悪口を考える。そして先ず

へ○ちゃん ○じゃないか ○って ○られて

○ね山へ ○りこんだ

へ○ちゃん○んねんじ ○やま○んぶくろ

○られてないて○つくり○つくり○んねんじ

へ○ちゃん○がつく○んざえもん○公の

○んむくれ○かけて○ちゃちゃ

という一般的な名ざしの歌の○の所に相手の名をよみこんで、反撃を開始する。

ついでその当の相手が、何かを言いかけたり、返事の冒頭に次の傍点のような言葉を口にすると、すかさずその言葉のそれに応じて、

へあのねのカボチャ　ぶっちゃけた

へあらまあ　デベソの宙返り

あんぼんたんの　ケツまがり

へなにはナットウ　こめこうじ

へおやまあ　ちゃりん　そばやの風鈴

へなんだは目から出る　カンダは東京

へああはあわめし　こうこに茶づけ

へいたいはいタチの　くそだらけ

へあいたい　どなたに　ぶすおんな

と浴びせる。相手がだまっていたとて決して許してはおかない。

へだまってダンゴ　ペチャクチャたべろ

へだんまりだん助　赤ダンゴ

うるさいとばかり遠くへ行こうとすれば――

へまけてにげてく　赤とんぼ

そしてまたひき返してくるなら――

へまたくるヤンマ　バカヤンマ
と執拗その上もない攻撃をくり返す。

子ども達の世界は、大人の考えるほど清浄無垢でガンゼい無邪気なものではない。大人の社会と同じように、或いはそれ以上に直接的で手加減せず、非難・競合・侮蔑・嫉妬・反目のうずまく世界である。時にとっくみ合いやケンカが起るのも当然の事である。特に言葉によって相手を圧倒しようとする時、子どもはいつもの時以上に、語いのもつ意味や言いまわし、音韻や重語やリズム、かけ言葉やたたみかけといったものにまで敵意と呪詛の意志を集中する。それは全く自発的な意志がみなぎり、自主的な判断によって営まれる積極的な世界である。こうした集中力や積極さによって、子どもは一步一步人間としての諸般の機能を身につけてゆく。それは発奮と陶冶の道行といっても差支えないだろう。

従ってこうした子どもの悪口うたやざれ事を、上品そうな家庭や情操教育を旨とする幼稚園などで、禁止したり、叱責するような事に対しては、全く逆に子どものこうした言動を面白がってけしかけたり、それを流布するのを事としているような「子ども屋」の行き方と同様に反対する。

子どもたちはそれなりのせい一杯の力をもって前人の行為をま

ねしたり、おかしいなと思ったり、同年の子と競ったり、反発して、生きぬこうと健闘しているのであって悪口うたも、そうした子どもの生活の一部、遊びの一つにすぎない。もし大人がその世界に介入するならば、先達者先験者たるにふさわしいものでなくてはなりません。子ども達の表面的な行為だけでなく、その底流にある心理や、いく重にも屈折し反映している心のひだをくみとり、それを子どもの成長と発展に資する大人の仕事として、活用する事が望まれようからである。

だから悪口うたの類を教育の場で教えたり分別ある大人がそれをはやしたるべきものではない事は明白である。あくまでも子どもの生活の中でひろまったり、変貌したり、消表したりしてゆくものである。問題はそうした直接教育の場に使ったり、持ちこめないものだから全く無視したり、否定するのではなく、また逆としてそれを採用する事だけに新しい意義があるのでもないという事である。その当の子どもの実体を把握する為その中に流れている子どもの積極性や向上する力を、大きく、大人自身の仕事の問題として、この見すてられていた「悪口うた」に暖かい、そしてするどい目を向けたいと考える。

(つづく)

参考文献

- 1) 林賢之助・大熊喜代松「ことばの治療教室」日本放送出版協会(昭43)
- 2) 加古里子「遊びの四季」じゃこめてい出版(一九七五)
- 3) 茨城民俗学会編「子どもの歳時と遊び」第一法規出版(昭45)
- 4) 加古里子「わらべ唄の世界」(国文学八月)学燈社(昭50)

